



各公演のアンコール曲は、ホワイエでの掲示の他
←順次こちらに掲載しております。

皆様のご来場の記念に
(プログラム最後の曲が終わった後)
カーテンコール中に限り
舞台上の演奏者を撮影する「特別タイム」

禁止事項

- ・動画撮影 ・演奏中の写真撮影(演奏者から許可があった場合を除く)
- ・フラッシュの使用 ・自席からの移動 ・立ち上がっての撮影
- ・手を高く上げての撮影など、周りのお客様のご迷惑になる行為

上記の他、SNSへの利用の際は、周りのお客様のうつりこみにもご配慮ください

「特別タイム」は、皆様の周りへの「思いやり」と「配慮」のもと運営しております。
ご協力をお願い致します。

お互いに気持ちよく演奏を楽しむために

- ★携帯電話は音や振動が出ない設定に。
- ★大きな声での会話は、ホワイエで。座席では静かにお過ごしください。
- ★拍手は、1曲全てが完全に終わるまでお待ち下さい。余韻を大切に。
- ★演奏中の物音にご配慮を。
 - ・プログラムやチラシをめくる音、膝から床に落とす音
 - ・飴やティッシュ、ハンカチを取り出す音
 - ・キー・ホルダーやストラップについた鈴の音
 - ・ビニール袋などのガサガサ音

鑑賞中に体調に異変を感じた場合は、演奏中でも遠慮なく最寄のドアからご退出ください。

お近くのお客様のご理解・ご協力をお願いいたします。

・館内各所にアルコール消毒液を設置しております。手指消毒をご利用ください。

Naruhiko Kawaguchi, Fortepiano

川口 成彦 フォルテピアノ・リサイタル
～18世紀を駆け抜けける!～



ワルター 1795年頃
(クリス・マーネ復元)

ジルバーマン 1749年頃
(久保田 彰 復元)

2025年11月23日(日) 14:00開演

主催:宗次ホール

ごあいさつ

こんにちは。本日は演奏会にご来場下さいましてありがとうございます。宗次ホールとの縁はもう10年以上となり、古楽器での演奏会ではいつも「今度の宗次ホールには何の楽器を運ぼうかな」と使用する楽器を考えることがまず最初の楽しみとなります。今年は宗次ホールに初登場の2台をホールに搬入させて頂きました!

一つ目の楽器は久保田彰さんが復元したジルバーマンのピアノで前半プログラムに使用します。ジルバーマンはヨハン・ゼバスティアン・バッハ (J.S. バッハ 1685~1750) も弾いたことでも知られるピアノで18世紀前半を代表する楽器です。これまでこのようなバロックの時代のピアノを宗次ホールに運んだことが無かったので、「今年こそは!!」と思いました。

後半で演奏する2台目の楽器はベルギーの製作家クリス・マーネが復元した1795年頃のワルターのピアノで、私が個人的に所有している楽器です。ワルターはこれまでの宗次ホールでの演奏会でも他の製作家の復元楽器を使ったことがあります。今回私が愛用している楽器を東京から持って来られたことも嬉しく、馴染みのある宗次ホールで演奏することが楽しみです。18世紀前半の楽器、そして18世紀末の楽器と共に今日はドイツ語圏の音楽を中心に18世紀を駆け巡り、じっくり味わいたいと思っています。

本日使用のフォルテピアノ



ワルター 1795年頃
(クリス・マーネ復元)



ジルバーマン 1749年頃
(久保田 彰 復元)

クリストフォリの後に

鳥の羽軸で当時作られていたプレクトラムが弦をはじいて音を出すチェンバロが盛えていた1700年頃、フィレンツェのメディチ家に仕えたバルトロメオ・クリストフォリ (1655-1731) が鍵盤を下ろすことでハンマーが弦を打って音を出すアクションシステムを発明し、チェンバロとは違って強弱を指の打鍵スピードで変えられるピアノが誕生しました。

そして1725年に音楽理論家および作曲家のヨハン・マッテゾン (1681-1764) の雑誌にシピオーネ・マッフェイ (1675-1755) が1711年に出したクリストフォリのピアノに関する論文のドイツ語訳が掲載され、それに触発されてドイツのオルガン製作家ゴットフリード・ジルバーマン (1683-1753) もピアノを作ります。ジルバーマンのピアノは1747年5月にポツダムにてプロイセン国王フリードリヒ2世の御前演奏でJ.S.バッハが弾いたことで有名ですが、1730年代からバッハはジルバーマンのピアノに触れており、バッハの助言がジルバーマンのその後のピアノ製作にも大きく反映されました。

その後ジルバーマンの優秀な弟子の一人であるヨハン・アンドレアス・シュタイン (1728~1792) がアウグスブルクを拠点に独自の楽器製作を深めていき、モーツアルトをはじめとするドイツ語圏の作曲家にも大きな影響を与えました。その後18世紀後期から19世紀前期のウィーンを代表するメーカーであるanton・ワルター (1752~1826) がピアノの歴史に大きな名を刻みます。ワルターの楽器もハイドン、モーツアルト、ベートーヴェンとは切っても切り離せない重要なピアノです。

ピアノの誕生から現代にかけてピアノはめまぐるしい変容を遂げてきたので、18世紀や19世紀の楽器は現代のピアノと音色や見た目からして大きく違うことばかりです。そのためそういった歴史的なピアノを便宜的に「フォルテピアノ」と今日では呼ばれています。

Program

プログラム

ヘンデル:組曲 第5番 ホ長調 HWV430

- I. 前奏曲
- II. アルマンド
- III. クーラント
- IV. エアと変奏

J. S. バッハ:カプリッチョ「最愛の兄の旅立ちによせて」変ロ長調 BWV992

- I. アリオーソ、旅を思いとどまらせようとする友人たちのやさしい言葉
- II. 他国で起こるかもしれないさまざまな不幸の想像
- III. 友人一同の嘆き
- IV. 友人たちは(どうしようもないと知って)集まり、別れを告げる
- V. 郵便馬車の御者のアリア
- VI. 郵便ラッパを模したフーガ

J. S. バッハ:イタリア協奏曲 ヘ長調 BWV971(全3楽章)

C. P. E. バッハ:ヴュルテンベルク・ソナタ 第1番 イ短調 Wq.49-1(全3楽章)

～休憩～

F. M. ロペス:ファンダンゴ風メヌエットと6つの変奏曲 ニ短調

M. アルベニス:ソナタ ニ長調

ハイドン:アンダンテと変奏曲 ヘ短調 Hob.XVII-6

ベートーヴェン:ロンド・ア・カプリッチョ「失われた小銭への怒り」ト長調 op. 129

モーツアルト:ピアノソナタ 第6番「デュレニツツ」ニ長調 K.284(全3楽章)

Program Notes

解説

文:川口 成彦

ヘンデル:組曲 第5番 ホ長調 HWV430

ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル(1685~1759)はドイツ生まれですが、イタリアでの成功の後にイギリスでも活躍し、最終的にイギリスで帰化した作曲家です。イギリスでは音楽文化に尽力しただけでなく、孤児や困窮音楽家を支援し続けた慈善家としての側面も知られています。彼の鍵盤作品では1720年に出版された『ハープシコード組曲第1集』が最も代表的なもので、中でもホ長調の第5番は、『調子の良い鍛冶屋』の通称(ヘンデル自身によるものでは無い)で知られる終曲によって特に親しまれています。

J. S. バッハ:カプリッチョ「最愛の兄の旅立ちによせて」変ロ長調 BWV992
イタリア協奏曲 ヘ長調 BWV971(全3楽章)

「音楽の父」とも言われるJ. S. バッハが10代の終盤で書いた「最愛の兄の旅立ちによせて」というタイトルを持つカプリッチョは、兄ヨハン・ヤーコプがスウェーデン王カール12世の楽団のオーボエ奏者になるために旅立った1703年頃の作品と考えられています。1700年に作曲されたクーナウの《聖書ソナタ》からの影響か、6つの楽章には表題的なタイトルがついています。

さてJ. S. バッハは生涯ドイツ国外には一度も出ることはありませんでしたが、特に20代の時に当時先進的だったイタリア音楽の勉強を重ねたことも彼の創作活動にも大きな影響を与えました。例えば1709年にもまだ若かりし24歳の彼が書いた《イタリア風アリアと変奏 BWV989》はそれを象徴しますが、1713年以降に行ったヴィヴァルディやマルチェッロなどの協奏曲の鍵盤楽器の独奏曲への編曲も同じくイタリアへのバッハの興味が大きく反映されています。そしてそれらの若き日のイタリア趣味への強い興味は後年彼の代表作《イタリア協奏曲 BWV971》(1735年出版)として実を結びます。

C. P. E. バッハ:ヴュルテンベルク・ソナタ 第1番 イ短調 Wq.49-1(全3楽章)

J.S. バッハの時代を経て、「前古典派」とも称される彼の息子たちが活躍する時代が到来します。次男であるカール・フィリップ・エマニュエル・バッハ(1714~1788)の音楽は文豪ゲーテなどに代表する「シュトゥルム・ウント・ドラング(疾風怒濤)」という文学運動にも見られる「理性に対する感情の優越」と共に語られることもあり、バロック時代の音楽よりも人間の情感をより直接的にドラマチックに表現しているものが多いでしょう。本日演奏するソナタが含まれる『ヴュルテンベルク・ソナタ集』はヴュルテンベルク大公に献呈されて作品で、30歳のエマニュエル・バッハの出世作ともなった作品です。

F. M. ロペス:ファンダンゴ風メヌエットと6つの変奏曲 ニ短調

M. アルベニス:ソナタ ニ長調

本日はドイツ語圏の作曲家たちと共に18世紀を歩んでいますが、少し気分を入れ替えて後半はスペインの作曲家で始めます。

マドリッド生まれのフェリックス・マキシモ・ロペス(1742~1821)は同地の王立礼拝堂のオルガニストとして王家に仕えていた作曲家です。「ファンダンゴ」はカスタネットやギター伴奏で踊られる活気のある舞踏です。男女がペアになって踊りますが、男が女に対して様々な恋のアプローチをするかの如く音楽は多様に変奏していきます。

ロペスの作品は半終止で終わるので、マテオ・アルベニス(1755~1831)のソナタをすぐに続けます。宗教音楽において当時名の知れたマテオ・アルベニスは教育者としても活躍し、ハイドンやモーツアルトの音楽をスペインにおける教育の場に先駆けて取り入れた人物だと考えられています。1790年頃に書かれた単一楽章の『ソナタニ長調』はサバテアードという靴底で床を打ちながら踊られるスペインの舞曲の調子による快活な作品です。

ハイドン:アンダンテと変奏曲 ヘ短調 Hob.XVII-6

ハイドンは約60曲のピアノソナタを残しましたが、彼が61歳となる1793年に作曲された『アンダンテと変奏曲』の自筆譜にも「ソナタ」と記されています。しかしソナタに仕上がる構想とは違って、この作品は1799年に単体の作品として出版されました。ヘ短調という調性からも哀しみに溢れていますが、作曲年に亡くなったマリアンネ・フォン・ゲンツィンガー夫人の死が作曲のきっかけになっていると考えられています。ハイドンの鍵盤作品の中のまぎれもない傑作の一つでしょう。

ベートーヴェン:ロンド・ア・カプリッチョ「失われた小銭への怒り」ト長調 op. 129

129という作品番号を持つこの作品はベートーヴェンの晩年の作品と思いきや、1795年に作曲された初期作品で、ベートーヴェンの死後に出版されました。彼はこの作品の一部を空白にしていたので未完作品でしたが、出版社であるディアベリ社が補筆版を出版し作品は世に広まりました。「失われた小銭への怒り」というチャーミングなタイトルはベートーヴェンによるものではなく、彼の秘書としても活躍し、ベートーヴェンの伝記を記したことでも知られるアントン・シンドラー(1795~1864)によるものです。自筆譜に記された正式なタイトルは「奇想曲的なハンガリー風ロンド」でハンガリー調の民族的も持ち合わせた作品です。タイトルは「失われた小銭への怒り」が今日広く親しまれており、私も小銭を無くした経験が色々あるので、このタイトルを今日も掲げさせて頂きます。

モーツアルト:ピアノソナタ 第6番「デュルニッツ」ニ長調 K.284(全3楽章)

1775年にオペラ《偽の女庭師》K.196の初演のために19歳の若きモーツアルトはミュンヘンに滞在していました。そしてそこでデュルニッツ男爵の依頼を受けてK.279~284の6つのピアノソナタを作曲しました。この6曲全てが「デュルニッツ・ソナタ」と呼ばれます。この第6番のみ副題として「デュルニッツ」と記載されることもあります。6つのピアノソナタの最後を締めくくるこの作品は、モーツアルトの全てのピアノソナタの中でも大作の一つとなっており、終楽章には長大な変奏曲が配置されています。モーツアルト自身もこのソナタを気に入って、頻繁に演奏していたと伝えられています。

Profile

プロフィール



©Fumitaka Saito

Naruhiko Kawaguchi, Fortepiano

フォルテピアノ 川口 成彦

1989年盛岡に生まれ、横浜で育つ。第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクール第2位、ブルージュ国際古楽コンクール最高位。フィレンツェ五月音楽祭や「ショパンと彼のヨーロッパ」(ワルシャワ)、モンテヴェルディ音楽祭(クレモナ)をはじめとした音楽祭に出演。協奏曲では18世紀オーケストラ、{oh!} オルケストラ・ヒストリチナなどと共演。2023年には神奈川フィルハーモニー管弦楽団の弾き振りも行う。東京藝術大学楽理科卒業後、同大学およびアムステルダム音楽院の古楽科修士課程修了。フォルテピアノを小倉貴久子、リチャード・エガーの各氏に師事。第46回日本ショパン協会賞、第31回日本製鉄音楽賞 フレッシュアーティスト賞受賞。

またスペイン音楽をこよなく愛し、自主レーベルMUSISによるCD『ゴヤの生きたスペインより』や自主公演「スペイン音楽の森」などのプロジェクトも展開中。

次回公演のご案内

2026年11月28日(土) 川口成彦フォルテピアノリサイタル 決定

詳細・発売日等は決定次第 公式WEB・LINEで発表いたします